
さまよえば三角州

A - 9

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

さまよえば三角州

【コード】

N6971C

【作者名】

A-9

【あらすじ】

図書館で指輪を拾ったことをきっかけに異世界へと迷い込んだ高校生。時代を超えた出会いの中、新たな戦いが始まるうとしていた。

一 図書館

雨が降る。地に降りた雨は川となり、海へと流れる。海はやがて蒸発して雲を作り、雨を降らせる。

雨は嫌いだった。

いや、外出を避ける理由を雨に求めていただけかもしれない。なにしろ、晴れたら晴れたで進んで外には出ないからだ。

しかし、用事があればまた別だ。図書館へ本を返さなければ。晴れでも雨でも、外出は面倒くさい。

その図書館は、出不精の一也ですら学校帰りに立ち寄ってしまうほどの近所にあり、こうして時々休日に返却期限が訪れる原因にもなっている。

入り口で傘を畳んでいると、クラスメイトの一人とすれ違う。一也は目を逸らして気づかないふりをしながら図書館へ足を踏み入れた。

雨の図書館は人も少ないかと思えば、却って暇になる人種が多いのか、平日のそれよりは十分に多い。

まずは手持ちの本を返し、ついでに何か別の本を借りるべく、館内を散策する事にする。

係員の機械的な対応に、無感動。

書棚を巡り、何冊かの本を手にとっているうち、歴史の棚に行き着くと、そこに同じクラスの女子生徒がいた。

相手は彼女を見つめる彼の視線に気づくと、頭を下げるように首を少し上下に動かしただけの反応を見せて、その場を離れていく。

一也は話しかける気もなかったし、相手もそうされることを望んではいないだろう。

この図書館は一也だけでなく、彼の通う高校の生徒の多くがよく

利用しているが、その中でも彼女の姿は特によく見かけていた。

不定期に、割と多めの周期で通う一也が高い確率で見かける彼女である。その利用頻度は彼のそれを大きく上回るのだろう。

また、図書館内でよく出会うということは、見ている棚も同じ、つまり興味のあるジャンルが同じであるともいえる。

彼女と自分に共通点があることが、なぜか嬉しかったし、それが好意に繋がらないと言えば嘘になる。

彼女はクラスでも目立たない存在で、美人と呼べるほどの容姿でもない。

それでも、一也は彼女のことが好きだった。それを直接伝えられるようなロマンチックなチャンスがいつか訪れたらいいなと期待もしていた。

しかし、彼が学校で置かれている立場からすれば、きっと相手にされないだろうし、よほどの良い雰囲気であっても勝てる見込みは無いだろう。だったら、こうして距離を置いて憧れに留めておいた方が幸せだ。

はあ、とため息をついて、静かな図書館に意外と響いた音に少し慌てる。

その時、先程まで彼女が立っていた場所に何か光る物が落ちていくことに気づいた。

それは指輪だった。銀一色で、継ぎ目のような装飾が見える。拾い上げてみるとそれは継ぎ目ではなく、ねじれたようになっていくことが分かった。

表の面を辿っていくと、いつの間にか裏面になっており、何とかの輪とかいう奴だ。

返さなくちゃ、とは思うものの、彼女はもうどこかへ行ってしまったし、これは落とし物だ。受付で預かってもらえばいいや。などと考え、ついでに手に取っていた本の貸し出し手続きを済ませるところにする。

「すみません、あの」

手続きを終え、例の指輪を預けようかとしたまさにその時、出口に向けて歩く彼女の姿が視界に入る。

「いや、やっぱりいいです」

一也は思わず指輪を手にも、彼女の後を追って図書館を出た。

二 撮影所

何かを期待した訳ではないが、一言二言でも話ができたらと思っ
た。

赤い傘をさす彼女の後を急いで追ったものの、運悪く車の波に足を止められ、なかなか追いつくことができない。

じめじめとした雨が一也に走らせることを拒む。

そうこうしているうちに、彼女の姿は見えなくなってしまふ。

初めのうちは、辺りの角を曲がれば赤い傘と共に彼女の後ろ姿を見つけれられたが、徐々にその姿はおぼろげなものとなっていく。

周囲の風景も雨の中、霧に包まれたようになり、金と銀のきらめくような光が見えたかと思えば、竹藪や、アスファルトでは無い土の道路、見知らぬ風景が時々現れる。

それでも、前に行く灰色のかすかな影が、一也が目的とする人物である確信だけは何故か揺るがなかった。

いつの間にか雨は小降りになり、気が付くと止んでいた。

傘を閉じた彼は、今もなお変わらぬ薄暗さを持つ辺りの風景を見回す。つい先程まで目の前にいた灰色の影は完全に見失ってしまった。
ている。

ここは、どこか池沿いの街道のようだ。

周囲はそのほとんどが森か、あるいは池の水かで、その隙間には廃屋としか思えない木造の小さな家が、片手で数えられる程度見え隠れしている。

遠くから音が聞こえる。耳を澄ますと、それは何かの足音だ。

別にやましい事があつた訳ではないが、本能的に慌てて近場の森の影に身を隠して眺めていると、なんだか小さな馬に乗り、時代劇のような鎧甲冑のフル装備をした二人の武者が現れる。

二人の武者は、馬上でなにやら言葉を交わしているようだ。

「舟助や。そちは鎧に何か細工をしたであろう」

「いえ、普段の通りに御座います」

「鎧とは、これほどに重いものじゃったかのう」

様子を伺う限りでは、二人は上司と部下の関係で、何があったか気落ちしている様子だ。

そういえばそんな物語をどこかで読んだ気がする。一雨で周囲を見失ううち、どこかの撮影所にも紛れ込んだのだろうか？

「それは心の重さに御座います」

舟助と呼ばれた、二十代ぐらいに見える若い男が、どことなく芝居がかった調子で言う。

「なに、出戦に敗れたに過ぎませぬ。国元へ戻れば再起も出来ましよう」

どうやら上司を励ましている様だ。

「そちは何もわかっておらぬのじゃ」

舟助は上司と話しながらも少し後ろに馬をつけ、歩みを止めがちな上司を無理矢理に前進させているようだ。

その二人が一也の潜む目の前を過ぎようかという時、ひゅっと鋭い風の音を感じたかと思うと、舟助を乗せた馬の尻に矢が突き立った。

馬は大声を上げて、尻の矢を抜き取ろうとでもするのかのように、己の体をぶんぶんと振り回し、敵の出現に慌てて弓矢を構えようとしていた乗り手をも振り落とす。

上司は一刻も早く敵から離れるべく、脇道を選ぶべきだとも考えたのか、街道ではなく池の中へ向かって馬を走らせた。

しかしその池は案外深く、しかも沼地のようにぬかるんでおり、なかなか足が進まない。

気が付くと馬が足を絡ませ、池の半ばで立ち往生してしまふ。

そこへ敵方から放たれた矢が容赦なく首筋を貫き、彼は自らの鎧の重みと共に水中へと没した。

「誰々討ち取ったり！」などと叫ぶ声が聞こえ、犯人と見える幾人かの騎兵が池の死体のもとへと飛び込んでいく。

一方の一也は、落馬した舟助とちょうど鉢合わせしてしまい、彼の短刀を首筋に感じながら、二人で草むらの中に潜んでいた。

「貴様、忍びか」

舟助は意味の分からないことを言った。

「すみません、撮影中だとは知らなくて……」

一也も意味不明の回答をした。

「撮影？ 何を言っている」

舟助は一也の首筋から短刀を離すと、それをしまいながら、明らかに困惑した様子でつぶやいた。

「この展開は変則的だ。」

それにその姿。拙者の知るような敵ではあるまい」

一也は特にオシャレに興味のない高校生が休日に着るような、ごく普通のＴシャツにジーンズ、スニーカーにかばんという出で立ちで、要するにこの時代劇にはそぐわない。

舟助もそれを察して、彼が部外者であることを認めたのだろう。

しかし、この男、生死を賭けて戦っていたはずの先の場面より、こうして自分の姿を認めてからのの方が感情豊かだ。役者失格である。「まずはここを離れよう。貴様の事を聞きたい」

舟助は今も上司の死体に群がっているであろう敵達の様子を少し伺うと、一也に「かがめ」と手のひらで示し、自ら手本を示すように森の奥へと歩んでいった。

これは「撮影の邪魔だ、こっちへ来い。説教してくれるわ」という事だろう。一也はカメラに映らないよう気をつけながら後を追った。

三 廃寺

しばらくすると、二人の進む獣道は段々と登りになっていった。どこか山へと入っているようだ。何かの葉っぱが体に触れるたびに不快感を感じるし、でこぼことした地面には時折足を取られそうになる。

こんな所に撮影のキャンプでもあるのだろうか。
やがて舟助は足を止める。

そこは開けた、意外に広い敷地で、ぼろぼろの小屋や、祠のようなものが立ち並ぶ。廃寺とでも呼んだ方が正しいのだろうか。そんな雰囲気だ。

ここも撮影セットの一部なのか。あたりに人気はなく、ようやく一也にも何か不安な気持ちが生まれていた。

二人はその小屋のひとつに身を落ち着け、互いに名乗りあう。
一也は自分が普通の高校生で、忍者役とかそういうものではないこと、学校でも目立たない、相手にされないほどの小物だということ、今もたまたま道に迷っただけだと説明し、撮影を邪魔するつもりではなかった事を主張した。

一方の舟助は、結構な重量があると思われるその甲冑を脱ぐ気配も見せず、一也の話には気のない相づちを打つと、自らは大真面目に何とか家の何々所属の誰々などと名乗り、その軍が上洛のため、西へ向けて進軍中であつた事を語った。

「そこで、予想もしない小勢に敗れたのだ」
彼は戦鬪の経緯についての説明を加えたが、一也には縁の遠い話で、よくわからず聞き流していた。

しかし、話の中で総大将の今川義元なる名前が現れると、思わず声が出てしまった。

「あの、桶狭間のですか？」

一五六〇年、今川義元は桶狭間で織田信長の奇襲を受け、敗北し

ている。

「左様、その桶狭間だ」

敗戦の空気を感じた彼は、直属の将 先の上司と共に戦場から逃げ出したのだという。しかし、追撃に上司を喪い、ただ一人で生き延びる事になってしまったということらしい。

この話からすると、彼が精神異常者か、あるいは手の込んだ詐欺師で無い限り、ここは桶狭間の戦い直後、つまり過去の世界ということになる。

信じがたい話ではあるが、現実よりもパソコンや物語の仮想現実の方が身近な一也にとっては、さもありなんと行った風で受け止めることができた。

しかし、そんな戦国時代に自分が来てしまったとして、ここで生きていける自信はない。なにしろ、この時代には図書館もパソコンも無いのだ。それどころか、一也のような貧弱な人間にとっては命の価値すら無い時代かもしれない。

「なんで、過去なんだよ」

せめて未来か何かであれば、自分も生きていけそうだし、何より楽しそうだ。つい恨み言も口に出してしまう。

「いや、それが過去ではないのだ」

舟助がその衣装と体格には似合わない困ったような顔をする。

「説明は難しいが、そうだな。例えば、先の男は幾度も討たれ続けている」

彼は明らかに意味を分かっている話相手を前に、言葉を選びながら言う。

「あの男が死に、目的を見失って歩いているうちに、街にたどり着く。そこでは今川軍の上洛の準備が進んでいて、私は徴兵され、一軍に加わる。」

その軍の将は死んだはずのあの男なのだ。

しばらくすると再び織田軍に奇襲をかけられ、私だけが生き延びる。そんなことが繰り返されているのだ」

「何度も過去に戻ってしまう、ということですか」

「そうではない。合戦に至る経緯やその経過、物語は常に異なっている。今川の軍を百鬼夜行が襲い、その隙に乗じて織田が現れたこともあった。」

しかし、今川が敗れ、織田が勝ち、私は一人生き残るといふこの大筋だけは常に固定されているようだ」

相変わらず、よくは分からなかったが、要するにここが現在でも過去でもない、一つのシナリオを何度もリメイクして繰り返す謎の空間であることは分かった。

「まったく、何度も繰り返すうちに、全てがどうでもよくなってしまった」

いつしか舟助は繰り返される寸劇の役者に徹することになったのだという。そうすれば戦に敗れ、独りになる苦しみを感じることも無いからだ。

「なんだか、よく分からないですね」

一也は、舟助がどれだけ熱弁を奮ってもそれ以外に浮かぶ言葉がなかった。自分の思考も、彼の言う時間のループに巻き込まれてしまったのかもしれない。

「だが、今度は貴様がいた」

一通りの身の程話を終えると、舟助は今回の件の異常性について話を始めた。

常に大筋が変わらないはずのループの結末が、一也の出現により変わってしまったのだという。

確かに、今の彼は独りではない。

「でも、それがどうしたっていうんです」

「この世界を抜け出せるかもしれぬ」

いや、自分一人がたまたまこの奇妙な世界に迷い込んだだけで、大した希望も持てないだろう。むしろ、自分という被害者が増えた分だけ状況は悪化したとも言える。

彼は物語に登場するような、異世界からやってきたヒーローなど

ではない、ただの根暗なパソコンオタクだ。

現に、舟助の言葉には何の感慨も覚えていないし、どんなアイディアも湧きません。

四 異世界

結局、ここが異世界だとは分かったものの、自分は一体何をすべきかもわからない。

それは舟助についても同様で、一也の存在によって希望を見いだしたとは言っても、彼は決められた流れの他の道を一切知らなかったのである。

二人の話に一段落がついた頃には陽は傾き、ようやく晴れ間を見せた空と未だ残る灰色の雲とを赤く染め上げていた。

時折、雨の忘れ物がぼたりと音を立てる。風にざわざわと葉ずれの音を奏でる静かな廃寺は、一也に非現実感を強く感じさせた。

「今宵はここで泊まることになるだろう」

初めからそのつもりで選んだのだろうが、この小屋にはちよつとした生活には不足しないだけの空間と設備、蓄えがあった。

舟助は乾いた薪を見つけて囲炉裏に投げ込むと、懐から何かを取り出し、手際良く火種を作る。まるで巨大なライターだ。一也はこの時初めて火打ち石の使い方を知った。

虫の音が聞こえる。

やがて炎は落ち着き、ゆらゆらと影をぶら下げた舟助は、一也の時代についての質問を投げかけていた。

彼は先に述べたようなくつかの不可解な現象に遭遇し、ここが終わりのない異世界だと気づいてからは、何が起きても気にしないことにしていたという。

確かに、目の前に突然未来人が現れているのだから、もっと驚いてもいい。

だが、相手が誰であれ、話をできる事が嬉しいらしく、質問そのものよりも言葉のキャッチボールを楽しみたいようだった。

一也は高校生活のこと、それがあまり面白くない事を語りながらも、戦場で命を賭けて戦ってきた男の前に、なんだかくだらない話

だなど思った。

舟助はそんな話を特に感想を述べるでもなく聞き、時折文化の違いから理解出来ない箇所を尋ねたりした。

パチパチと音を立てる囲炉裏の炎に、室内はぼんやりと赤く染められている。外からは湿った空気と共に、ピタピタと水をはねる音が流れ込む。

「何か、聞こえぬか？」

舟助が小屋の外に目を向けている。

ピタピタと聞こえる音は、言われてみれば、水を踏む足音だ。

一也自身は現代人だが、舟助を初め、この世界の文化は明らかに過去のそれだ。ならば、こんな山奥の廃寺で起こりうるイベントと言えはいくつか想像がつく。

「山賊……でもいるんでしょうか？」

舟助は外に向けられた目を外さない。

「ここでは何が起こるか分からぬ。だが、そういう類のものではないな」

彼は音を一也に聞かせるかのように、一瞬言葉を止める。音は少しずつこの小屋に近づいているようだ。

「足音は一人分だ」

その言葉に一也は安心するどころか、口にはしなかったもう一つの可能性を考える。

それはつい先程舟助から聞いた話だ。

彼がループの中で体験したシナリオには、魑魅魍魎の類、つまり化け物や妖怪との遭遇を果たしたものもあつたという。よくあるオバケであればまだしも、骨と肉とを裏返したような、内臓をぶら下げた人間やら、ねっとりとした赤茶色の液状で、所々触手のように伸びたり縮んだりしながら波打つ皮膚を持つ怪物などと生々しい話を聞かされたばかりである。

場所も場所だ。その魑魅魍魎でも現れるのでは無いか。あるいは狐なんぞに化かされやしないだろうか。それは神社か。

さまよえば三角州

そんな事を考えていると、やがて足音の主は姿を現した。

五 平安京

それは少なくとも人間だった。

最初に目に入ったものは、いかにも京都を思わせる黒と白に彩られた衣装。一也の脳裏には狩衣という言葉が浮かぶ。

次に少年とも少女ともつかない、美しく整った顔に白い肌。

そして、袖や唇を彩る紅のラインに、猫か鷹かを思わせる鋭い眼には、黒髪に似合わぬ青い瞳。

それら全ての要素が合わさって、明らかに人間でありながら、どこか人間離れた不気味な雰囲気漂わせている。

「すみません、驚かせるつもりはなかったのです。」

ただ、人の明かりに誘われまして」

男性ならば高め、女性ならば低めといえる、中性的な済んだ声で、その者は言った。

一也はこの者を美しいとさえ感じていたが、女性と思うと緊張のあまり、とても直視出来ない。言葉を交わすことも出来ないだろう。よって、この者は男性、美少年の類であると認識することにした。幸運なことにそちらの気はない。

「お尋ねしますが、書をお持ちではないか？」

陰陽の理と呪の全てが書かれているものです」

彼の問いに、一也と舟助の二人は首を横に振る。舟助はその言葉に何かを察したか、

「そなたも訳ありのようだな。そして、拙者と同じく、長く独りであったようだ」

彼には自身の経験もある。この者が二人を見た際の反応が、自分が一也と出会った際のそれと同様であったことぐらいは容易に見抜くことができたのだ。

「旅は道連れ。少し話をしていかがぬか」

舟助の誘いに彼は感謝の言葉を述べながら小屋へと足を踏み入れ

る。

「私は平安の都で陰陽をたしなんでいた者です。名は、鬼一法眼とでも致しましょうか」

法眼は微笑みを浮かべて実名を伏せた事を示す。

「名は、呪とも言います。言えぬ事、そして畏れ多き名を借りると、ご容赦頂きたい」

「六韜の鬼一法眼どのか」

舟助は甲冑をかたかたと揺らしながら豪快に笑い声を上げた。

その名前に一也は心当たりは無かったが、舟助の戦国時代でも高名なほどの偉人なのだろう。その名をやすやすと名乗ってしまった事が笑い所かなと考える。

一也の見たところ、この二人とも、なにか己の過去を軽んじている風がある。

彼の思つ過去の身分制度といえ、今よりも遙かに厳格だったはずだ。

より高い身分の者を話の上で適当な物のように扱ったり、その名を騙ったりする事などすれば、即座に命の灯火が消えてしまうだろう。

舟助の話の通り、彼らは幾度もループを続けるうちに、そうした社会の仕組みがどうでもよくなったという事なのだろうか。

「私は兵法は存じ上げませんが」

法眼は元の無表情な顔に戻っている。

彼の物語はこうだ。

時は平安。寿永二年。

見習いとしてある陰陽師の元で働いていた法眼だったが、この師匠がある公家の娘に恋心を抱いたそうだ。

垣間見、らしからぬ短歌などを詠み、ようやく言葉を交わす仲までに至ったのだが、その女、師匠に会うなり、

「世に究極の陰陽法があると聞きますが、いかなるものでしょうか」などと問うたらしい。

おそらくこの陰陽師をからかってやるつもりだったのだろうか、惚れた女の前では良い格好をしたくなるが男のさだめ。

源平だの、戒厳令、同族殺しだのと物騒な世の中で、彼もまた戦っていたのである。

「存じ上げております。しかし、私も未熟の身。二年の後には必ずやお見せ致しますよう」

簾越しにそんな約束を交わし、「全て見せけむ陰陽の法」などとどうしようもない歌まで証拠に残し、意気揚々と帰宅するなり法眼を呼びつけた。

「世にはかの安倍晴明の筆による、陰陽の全てを記した秘書があるという」

長々と講釈が続き、

「他家の秘書とはいえ、お主の勉強にも役立つ。その書を二年以内に探し出して参れ」というわけだ。

法眼の場合、その大筋は「陰陽の秘書を探し続ける」というもので、舟助のそれに比べればシナリオのバリエーションは多かつたらしい。

しかし、この世界が現実の時の流れに即しているとすれば、平安からの千年近く、彼はその書物を探し続けていることになる。

しかもそれは実在するかどうかも疑わしい代物だという。

「私は師の為を思つて、また己の欲のために、ただ必死に書を探し続けたのです。」

やがてその手がかりを失った時、この世界に迷い込んだものと思えます」

それでも彼が書を探し続けているのは、一縷の望みを捨てきれずにいるからだろうか。

「とうに、二年など過ぎ去ってしまつておるのにな」

自嘲気味な笑みを浮かべる。

「そなたもまた、繰り返す渦の中で拙者達に出会つたのだ。あるいは

は、渦を抜け出すこともできよう」

舟助は暗に、共に行動することを提案する。法眼は何も答えず、ただ眼で同意の意を示した。一也は、こういう場で発すべき言葉を知らない。

その代わり、昼から何も食べていない腹がぐうと鳴った。

「明日には、山を下りよう」

舟助は笑いを堪えながら宣言した。

六 谷ノ市

夜が明けて、一行は廃寺を後にする。

幸いにも山の麓には集落があり、しかもそれなりに発展した市場町だった。

そこはどうも最近興った市といった具合で、真新しい急ごしらえの家々が目立つ。

だが、それを起爆剤として成長を続けているのか、普通の市場がそれ以上に活気もあり、往来は売る者買う者見る者達でごった返していた。

「このあたりは、山の谷間ですんで、谷の市なんて呼ばれておりや
す」

手近な男に道案内を求め、食料などを買い歩く。

この男、市場にありがちな大道芸人らしく、道案内の傍ら、狐の面に蛇腹をつけた妙な玩具を伸縮させながら「ご利生」などと呼びかけて小銭を募っている。

これには一也もなんだか楽しい気分になり、「ご利生とは何かと問
えば、

「仏様のありがたいお言葉じゃ」

にやにやと笑いながらはぐらかした。文字通り、何か御利益の有る良い言葉なのだろう。

「あれは戦か？」

舟助が前を指して尋ねる。その先には、明らかに急造したと思われる簡易の物見塔に、その周り一帯を囲む帷幕が見える。

「へへ、あれは停戦の決まったお武家さん達ですわ。じきにお館を
築かれるそつで」

「ほう」

陣の影からひらりと旗印が舞う。舟助は足を止めた。それに気づいた一也と法眼が振り返ると、彼は顔面蒼白、まるで博物館に飾ら

れた鎧人形のように硬直していた。

「舟助殿、いかがしましたか」

法眼が問うも、言葉が喉につかえて出てこないようで、ようやく無理矢理に絞り出す。

「繰り返されて、いる」

彼はこれまで、敗戦後に独り歩けば、やがて街に着き、そこでまた戦が起こるといふ物語を繰り返していた。

今の彼は一人ではない。しかし、繰り返しは終わらなかつた。

陣営になびく旗は、かつて彼の所属した今川軍のそれだつた。

七 一寸先

多少の差異はあれど、やはり大筋に変化は無いということだろうか。

舟助は落胆の色を隠せない。

それを気遣うように法眼が彼の肩を叩いた。

「安心されよ。戦は終わりだと、たった今聞いたばかりではないですか」

「戦に加わらなければ、繰り返しは起きないのでは？」

一也も樂觀的に答えた。少々時代は違うものの、周囲の風景はどう見ても平和な商店街のそれである。わざわざ参戦しなければ、巻き込まれることは無いだろう。

「いや、それは違うのだ」

舟助はようやく落ち着いたようで、その痛みを確かめるようにばんばんと頬を叩く。

「織田軍は、逆落としての奇襲をかける」

そして、遠くに霞む山々を眺めて言う。

「ここは、一ノ谷だ」

彼は己の考えを説明する。

一ノ谷の逆落としては、源平合戦の中、源義経が一ノ谷に布陣した平氏に対して行った策略で、鶴越と呼ばれる地の断崖絶壁を馬で一気に駆け下り、敵の隙を突いてさんざんに切り崩し、それが彼らの勝利を呼び込んだというものだ。

舟助の知識で付け加えるならば、この時、平氏の軍勢は偽の停戦要請に武装解除をしていたのだという。

つまり、ここ山の麓の市の谷で、武装解除した一軍があり、それが彼の中では常に敗戦が定められた今川軍と来れば、これはキャストを変えた平家物語の再演に他ならない。

「舟助殿は、その平曲とやらにお詳しいのですか」

突然、法眼が場違いな質問を投げる。

「左様、恥ずかしながら法師の語りは幾度も聞き入り、読本の類も手に入る限りは読んでいます」

答えた舟助は、そうそう、と付け加える。

「鬼一法眼も、平家の諸本に登場しておる名前だな」

そういえば、一也が舟助と出会った池沿いの街道でのくだり、あれは教科書で目にしたものだ。確か、平家物語の何とかという大将の話だ。

舟助の言葉に法眼は納得したような表情を作る。

「すなわち、ここで目にする舞台は、舟助殿の知識の及ぶ範囲内で作られているという事ではないですか」

相変わらずの無表情だが、その声は少しだけ熱を帯びている。

「私も長く旅を続けて参りましたが、己の思う異形の類を目にする事はあっても、自ずから説明できぬものに出会ったことはありません」

つまり、シナリオのループを初め、この世界は己の知識や体験、想像を映したものであるのではないかという事らしい。

「この推測が正しければ、此度の物語には私や一也殿の世界も混ぜておつてもよいのではないでしょうか」

一呼吸置いた。

「そこに勝機は見いだせませんか？」

そう言われると、先程この市場を現代の商店街のように感じたのは、一也の持つ現代の知識が映し出されていたからかもしれない。

もつとも、彼にはループの経験が無いので、自分の持つ世界のパターンまでは分からなかったが。

「言い換えましょう。舟助殿や我々個々の物語は定められていても、互いに干渉しあう事はできるのです」

例えば、私はその敵軍に対して陰陽の術を使うことができます」「法眼は手品でもしてみせるかのように狩衣の裾をふわりと舞わせた。

「一也殿は、優れた未来予知を行えるでしょう」

突然の指名に一也は間抜けに口を開け、疑惑の目を持って聞き返してしまう。

「一也殿は未来を知っておられる。その知識が世界に映れば、戦の行く末も自然とそのようになる」

よく分からない。自分の知識が戦局を左右すると言うことが。

「いや、そんなにうまくいくのかな」

「無論、やらねば分からぬ。だが、やらずに諦める必要はない」

答えたのは法眼ではなく、舟助だった。

「この戦、勝ってみせよう」

分かりやすいほどに元気を取り戻した舟助は、早速作戦を……などと始めた。

「これは奇妙なお話、月にむら雲、花に風。あっしもお供致しましよ。ご利生」

さりげなく、隣でずっと話を聞いていた大道芸人は、狐の首を長く伸ばしてへへへと笑った。

八 今川軍

一行はその足で今川軍の陣営へと向かった。

そこにいるのがシナリオ通りの今川軍であれば舟助の顔が利くし、原作通りの平氏軍であれば、法眼の顔が利くかもしれないというのだ。

「しかし、笑えますね」

法眼はその顔に僅かな微笑みを作っていた。

「一ノ谷の戦いが、後世では鶯越の急勾配から奇襲した事になっているとは」

鶯越の断崖絶壁は確かに平安京でも有名だったが、そこは崖も崖で、いくらなんでも駆け下りるには無理があるし、そもそも一ノ谷とは遙か離れており、そこを義経が利用したはずがないというのだ。

「まあ、背後の山から奇襲を仕掛けたことは事実でありましょう」

法眼の目を追うと、この街の片側半分ほどを囲む山が見えた。

近場にこのような山があり、しかも軍の目がそれほど向いてないとあれば、確かに義経は鶯越ではなく、この山からの逆落としを行ったのだらう。

「史実と現実ねえ」

何か妙な違和感を感じながらも、一也は納得した。

「法眼どのは義経をご存じか」

舟助が色々と聞きたそうな目で法眼を見つめる。

「知らぬ者の方が珍しいでしょう。もともと、平氏が滅びてより先の歴史は体験しておりませんが」

その頃にこの世界に迷い込んだということだ。しかし歴史の生き証人が目の前にいるとは思議な気分である。

そのうえ、一也にとって過去の人である舟助が、さらに過去の人である法眼に同じ感慨を抱いているというのは面白い。

笑いながら視線を隣の二人から前に戻すと、目の前に巨大な顔が

あつた。

「わっ」

巨大な顔はひよこひよこことおかしな動きを見せる。人間の頭から膝までくらいのサイズの、これは不気味な張り子のお面。

「サアサめでたき大面相。ステテンステテン」

声は先の大道芸人だ。いつの間に着替えたのだろうか。

彼は道を蛇行するようにフラフラと歩き回っていく。

「おいおい、どこへ行く気だ」

大道芸人に気を取られていた一也が、後ろから呼びかけられて振り向くと、目的地はとうに行き過ぎていた。慌てて後方に待つ仲間の元へ小走りに戻る。

帷幕は何重かに張られ、武装を解除しているとはいっても見張りは厳重に配置されているようだ。

法眼は堂々とその見張りの前に立つ。

「失礼つかまつる」

彼は見張りと言葉を交わすと、一行の元へと戻り、中へと入るように促した。

一也の抱いていた違和感が段々と正体の定かなものになってきていた。

三人の旅人と一人の大道芸人を迎えたのは二人の大将だった。

正面に座る公家風の男は、側近より今川義元公であると紹介された。

そしてその横に侍る、同様に公家風の服装をしながらも、武人さながらの体格と威厳を持ち合わせた男は、配下にその名を呼ばせるまでもなく、自らを平知盛と名乗った。

九 戦支度

賀茂のなんとか、と名乗った法眼の言葉が効いたのか、軍を武装解除すべきでないという彼の意見や、その後の策略については驚くほどにすんなりと聞き入れられ、一行は特別顧問のような形で軍に迎えられた。

軍略については主に舟助が提案し、その通りに布陣が取られることになった。

本来駒に過ぎない彼のような立場からの意見が聞き入れられるはずもなかったが、これも繰り返しを重ねて得た経験による説得力のたまものだ。

この街は北を山に、南を海に守られており、主要な進入路は東西にしかない。

南には平氏の友軍がいると言うから、北から入って攪乱し、その間に東から主力を攻め入らせるといふ義経の戦略はまさに最良の選択肢であったといえる。

これにあたって、北からの奇襲を既に予知している舟助は、そこに数千騎からなる精鋭揃いの一軍を置いた。

原典通りであれば、この時の義経の部隊は百騎に満たないはずである。これが信長の桶狭間におけるそれに置き換わっていたとしても、二千騎弱となる。

軍勢に差があるのは時代背景ゆえに予測しづらいが、元が舟助の知識によるものだから、彼にとつて身近な戦国時代の人数を基準に考えるべきだと法眼が助言し、そのようになった。

事実、この場の軍勢ですら今川と平氏が連合を組んでいるように、その兵は相当の数が揃っている。

こうした奇襲への対処によって陣を崩さず、守りの戦を取れるという訳だ。

先に述べたように、平氏にしる今川にしる、史実ではどちらも数

は勝っている。相手の動きまで読んでいる以上、浮き足立たねば負けることはない。

念に念を入れた策を練り、その意図を飲み込めない者達にはそれを説明し、一通りが終わると、一行は陣中に作られた仮の宿の一室を借りて一夜を明かすことになった。

十望月

陣中は戦の前触れによる緊張で張りつめていたが、一也は定期テスト直前のあの雰囲気似ているな、と、どうでもいいことを考えていた。

「眠れるときに眠ることも兵士の勤め。皆、出遅れるなよ」

言うなり、舟助は寝息を立てる。この男は眠る時も甲冑を外そうともしない。いつ戦が起こるとも知れない戦国時代の武将は皆このようであったのだろうか。

外ではいつのまにか僧衣姿となった大道芸人が、何か紙片を手に、「戦勝や、戦勝祈祷でござい」

などとはやし立てながら、明かりの灯る小屋にさりげなく入り込み、上手に酒など施しを受けている。

「たいした根性だなあ」

先の例えで言えば、テスト直前の緊張をなんとかほぐそうとしている連中の群れにいきなり入り込んで、一緒に騒いでその楽しみを分けてもらうような行為だ。

ただし、やり方を間違えれば逆鱗に触れて殺されかねない。

「根性だけではない。あの方はこの空間の性質を真に理解しているようだ」

漢字の大の字のような、人の形に切られた紙片を並べながら考え事をしてきた法眼が、一也の独り言に答えた。

「あの方があれだけの衣装の備えを前もってしていたと思いますか？」

そして、一也の答えを聞くまでもなく、先を続ける。独り言には独り言か。

「この世界が、私たち参加者の想像から出来ていることがその答えです」

彼はその根拠を語る。

あの大道芸人は、己が姿を変えたいと思ったその時に、己の望む姿を生み出しているのではないか。

つまり、我々陰陽師が人形に呪を吹き込み、その効果を発現するように、この空間は、想像を吹き込むことで舞台を作り出しているのではないかという。

ここは、歴史の流れの中で、人の無念や無力感といった、行き場のない感情の堆積した場所なのだろう。

そうした呪や念と言い換えてもよい力で動いている世界だからこそ、その住人の持つ知識や想像にも影響されて揺れ動くのではないか。

「この法則こそが、勝利のための、最後の鍵とも言えるでしょうね」
法眼は一也に語るといふ形で何か考えをまとめている様子だった。その姿は日本人形のような、などという例えも及ばぬほど、あまりにも美しく、一也は一瞬ゾツとしながらも、つい見とれてしまい、異性を意識しそうになる自分に彼は男なんだと言い聞かせる。

一方で、法眼の語る言葉には、何かずっと引っかかるものがあった。

しかし、それを言葉に表現することができず、

「なんでも思い通りになったら、楽しいだろうな」
などと呟いていた。

「望月の欠けることが無くとも、心が欠けることはありませんよ」
史実に拠れば、桶狭間の戦いは五月中旬、一ノ谷の合戦は一一八四年の二月初頭に行われたという。

だが、この世界では冬の寒さも、春の陽気も感じられることはなかった。

十一 一夜城

異変が起こったのは早朝だった。

それは街から目と鼻の先、東の平地に忽然と姿を現したのである。城だった。

この最前線に現れた新たな敵の拠点に、軍は見事に浮き足立った。状況がつかめないでいる舟助は慌てて将校の集まる会議の場へと急ぐ。

「やってくれましたね、一也殿」

法眼が微笑を浮かべながら青い瞳で一也をまっすぐに見つめている。

「私と舟助殿が予知出来ない事態を招くことができるのは、貴殿だけです」

そんなことを言われても分からない。

だが確かに、織田軍の一夜城について、彼は知っていた。

一也は織田信長という歴史上の人物と、その数々の軍略について法眼に説明する。

彼は火縄銃や軍艦といった文明の利器にはさすがに理解が及ばず、啞然とした風であったが、その分を差し引いても、

「私たちはとんでもない相手を敵に回しているようだな」

とにかく、一也の言いたいことは伝わった。

「だが、貴殿にとって敵は過去の人間であることは救いだな」

法眼は優しく諭すように言った。

「心配なさるな。所詮は過去の人。貴殿は貴殿の武器を使えばよいのです」

法眼は昨晩作っていた人型の紙片を一枚取り出すと、二本の指でそれを挟む。

「私にとつては未来の敵だが、努力だけはしてみましよう」
何かを念じて空へと投げた。

刹那、紙片が爆発したかのように光を放つ。そして、空中に何か、巨大な動物が姿を現す。

馬のように長い首を持つ四足動物であることは分かったが、その体は色とりどりの体毛と、あちこちから生える鹿の角のようなものとで覆われている。

その巨大な動物が空中で太陽を遮り、地面に影を落とす。

「怖じけるな。各々、つとめを果たされよ」

普段の彼からは想像できないほどに大きな、通る声で、法眼はあたりでそわそわしていた兵達に命令を下した。

彼らは慌てて姿勢を正し、それぞれの配置へと戻る。

「他人の知識で作られた世界には、驚くほど干渉がたやすいようですね」

法眼は己の元に舞い降りた、巨大な獣の姿に満足げな表情を浮かべる。

「この神獣には、北面の守りをお願いしましょう」

彼は陰陽師という、一也の知識には無い武器を用いると共に、己の想像を形にするという先の仮説を実践して見せたようだ。

そして、これは戦力がさらに増したことを意味する。

「問題は東の城ですね。一也殿に何かお考えは？」

「そう言われても」

ただの高校生が信長に勝てようか。

「では質問を変えましょう。織田信長はいつ、どこで死んだのです？」

彼は家臣明智光秀の裏切りにあい、本能寺で自刃していたはずだ。それを伝えると、法眼は何でもないことのような顔をした。

「裏切りに弱いという訳だな」

「でも、あの城を建てたのは、その明智を倒した豊臣秀吉ですよ」

彼はふうん、と答えると、それ以上を告げず、取り出した筆で呪の紙片にさらさらと何かを書いた。そしてあたりの兵に声を掛け、それを持たせて東の一夜城へと向かわせた。

「次は、北の奇襲部隊ですね」

もう、東も北も問題ではないといった風に法眼は言う。

「見届けるだけで済みましよう」

その時、一夜城から火の手が上がった。かすかにしか見えないが、城内から打って出た織田軍は、町とは逆方向に向けて追撃をかけているようだ。

唾然としている一也に向けて、彼は微笑んで見せた。

「あんなものまで作れてしまいました」

十二 戦場

偽の明智光秀が見事に裏切り、一夜城の部隊を有らぬ方へと追撃させる様を見届けた法眼と一也は、北面部隊の元へと向かい、その陣頭で指揮を執る舟助と合流した。

彼の配下には、かつて彼の上司であった男も含まれていた。登場人物はシナリオ通りだが、仲間達の干渉のせいか立場は逆転している。

しかし、ここに先程法眼の放った神獣はどこにも見あたらない。その代わり、山の斜面にはちらちらと敵の甲冑が見え隠れしている。

「舟助殿、先程私の送った加勢はいかがしました？」

「いかがも何も、敵を見るなり碎けて消えていったわ」

舟助は戦場の興奮からか、加勢の喜びよりも、むしろ眼前で不吉なものを見せられた事を不快に感じている様子だった。

「それはおかしい。他人の物語であれば、いくらでも干渉出来るものだが」

法眼は納得のいかない様子で、こちらも不満げな顔を見せる。

ここで一也は昨日から感じている違和感の正体に気づいた。

「あの、舟助さんが知る一ノ谷は、鶉越の伝説的な義経の活躍だったと思います」

舟助は「それがどうした？」と言いたげな目で一也を見る。

「ですが、この戦場の様子はむしろ法眼さんの語る、史実通りの光景です」

確認するように周囲を見回す。何度見てもこの場所は、英雄的な義経の活躍の場というより、ただの泥臭い戦場である。

「それに、陣営には今川だけでなく、平氏の軍勢も混じっています。おかしいと思いませんか？」

舟助はできるだけ冷静に考えようと少し間をおき、しっかりと落

ち着いてから結論を出した。

「つまり、この戦場は、拙者だけの物語ではないと言ったことだな」
一也の出した結論もそれと同じだった。法眼もそれで納得がいった様子だ。

「私の術では、私の物語には干渉出来ないという事ですな」

昨晩用意した呪の紙片を取り出して、その使い方に考えを巡らせているようだ。

この物語は、舟助の物語であると同時に、法眼の物語でもある。同様に、一也の物語でもある。

各自の物語が顔を出した途端、それぞれの干渉は力を失う。つまり、結果として干渉することに意味はないのではないだろうか。

「いや、違うな。これは皆から生まれた新たな物語だ」

舟助は愉快そうに言葉を放つ。

「自分の知らぬ物語が相手であれば、いくらでも変えられようぞ」
そうして彼は甲冑を揺らしながら、大声で軍勢に令を下した。敵はもう、すぐそこまで迫っている。

「皆、生き延びろ！」

十三 理由

大道芸人は足軽姿で戦場をひよいひよいと駆けめぐり、敵を見つけると、戦うかと思えば何もしない。何か模様の書かれた紙片を投げつけるようにばらまいてはまた別の場所へと移る。

敵の少なさも幸いして、戦況は舟助の宣言どおり、彼の望む勝利と同然の優勢さとなっていた。

紙片を拾い上げた法眼は、「呪ではない」と呟いて、興味を示した一也に渡す。

そこに書かれた模様は、一也にとって見覚えのあるものだった。

「これ、僕の学校のマークですよ」

法眼は怪訝そうな顔をする。学校もマークも、彼にとっては未知の単語なのだ。

「鞆に生徒手帳があるから、見せますよ。ちょっと待ってください」
肩に担いでいた鞆を地面に下ろし、中を探る。と、そういえば図書館で本を借りた直後だったことを思い出す。

その中の一冊を懐かしそうに手に取ると、それは借りたはずの本ではなかった。

それは紐で綴じられた、いかにも古い和紙作りの本で、ぱらぱらとめくってみるとミミズの這うような、手書きの文字が踊っている。
「なんだこりゃ」

今度は法眼が興味を示した。丁寧に、しかし奪い取るようにその本を手に取り、おそろおそろ何枚かをめくってみる。

「これは、くだらない」

法眼はなぜかすっかり落胆した様子で本を閉じた。

そこへ、戦を終えた舟助がやってくる。その隣には例の侍大将平知盛が続く。

「法眼殿、その書物は、いよいよ手に入れなさったか！」

戦勝の喜びもあるのだろう。すっかり上機嫌で知盛と肩をたたき

合ったりなどしている。ため息をついた法眼とは対照的である。

「私が求めていたのは、まさしくこの本だ。しかし……」

法眼は本のあるページを開いて二人に見せる。舟助の顔がたちまち呆れ顔に変わるが、一也には文字の判別すらできない。

「これは、還世の術と書いてあるのだ」

「安倍晴明が残した究極の陰陽の法がこんなものとは」

伝説の陰陽術、それは元の世界へと戻るための魔法だったというのだ。

なお、参考までに記せば、彼の目にした書物は確かに安倍晴明直筆と思われるもので、その中身も究極の陰陽と称して差し支えないものだったが、現存する彼の書物とは一切関わりのない内容である。「しかし、これこそ私たちの求めていた術でもあります。折角なので使わせて頂きましょう」

法眼は早速、その手順を読み上げかけ、一行読んだ所でそれを止めた。

「思いの外、簡単なようだ」

術の発動者である法眼には何か詠唱のようなものが必要らしいが、他の者は己の目的を果たした上で、ただ帰りたいと念じるだけでよいらしい。

「私は書を見つけた。舟助どのは自軍を守られた。一也どのは目的を果たされたかな」

一也は頷かなかった。自信がなかったからだ。しかし、東の主力軍が彼の発言から敗退にまで追いやる事ができていたように、何か人の役に立てたという実感はあった。それに、

「僕の目的は、元の世界にこそ有るんだと思います」

舟助、法眼、彼らの存在を確認するように一也は二人を見つめた。「だから、それに気づくことこそ、この世界で皆さんと出会った理由であり、目的なのかなと……」

言い終わる前に、法眼は舟助と一也の背中に手を当てた。

「待ってくれ」

舟助は振り向いて法眼の手を止めると、傍らに立つ知盛に一言、別れの挨拶を述べる。

「見届けたぞ」

知盛は武人らしい堂々とした物言いであこれに答えた。その武人の顔は、生の喜びに満ちていた。

ただ一人、謎の大道芸人はこの場にはいない。知らぬ間にこの舞台から一足先に姿を消しているようにも思えた。

「では、失礼します」

穏やかな声ではあったが、その直後、首の付け根を強く殴られ、目の前が一瞬真っ白になり、数歩よろけて前進した。

「な、いきなり、なんてことをするんですか」

返事はなかった。

視力が戻ると、一也は雨上がりの濡れたアスファルトの上に立っていた。

十四 橋

コンクリートブロック、電信柱、高層ビル。それらはどれも見覚えのあるもので、一也は図書館から飛び出してまだそんなに遠くない場所にいることを自覚した。

目の前には赤い傘を畳んだ女の子が立ち止まって、こちらに振り返っている。

「何か用？」

不機嫌そうな感じではなかった。しかし、図書館からずっと後を付けられていたのは気分の良いことではないだろう。

「ごめん」と謝りながら、右手に何かを握りしめていた事を思い出す。

そこにはあの、銀色の指輪があった。そうだ、これを届けにここまで来たんだ。

左手の指でつかみ取ると、手の平には丸く握りしめた跡が残る。

灰色の雲の隙間からは、青い空と共に光が差ししている。

一也は彼女に歩み寄ると、その指輪を差し出した。

「忘れ物だよ」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6971c/>

さまよえば三角州

2009年6月29日19時18分発行